

子爵岡部長景の家庭教育

伊藤 真希

昭和戦前期に貴族院議員として活躍した子爵岡部長景家を事例として華族の家庭教育について考察する。岡部長景は旧岸和田藩藩主家に嗣子として生まれ、帝国大学を卒業後は外交官となった。その後貴族院議員となり、戦中には文部大臣を務めた。

岡部家では家庭の団欒を非常に大切にしていた。妻悦子と一人息子長均衡との関係は親密であり、家族で遊興に出かけることが多い。また、長景は長衡とは親密な関係にありながら、息子を異なった進路を進ませて技術者にした。そこで親として自身では対応できないことについて、さまざまなコネクションを活用して息子の進路を他方で支援をしている。

1. はじめに

岡部長景は旧岸和田藩藩主家出身の大名華族である。また同時に外務官僚、貴族院議員、戦時中は東条英機内閣文相にもなった昭和戦前期にリーダーシップを発揮した革新華族の一人である。以前、大名華族の家庭教育について有馬頼寧¹⁾、勲功家族の家庭教育について阪谷芳郎を取り上げた²⁾。本研究では大正期から昭和戦前期の華族の家庭教育についてさらに研究を広げるため岡部長景に注目した。

岡部長景の資料としては、国会図書館憲政資料室に「岡部長景関係文書」がある。残念ながら日記は昭和3年の10月下旬～11月中旬、4年、5年、6年1月～2月上旬および11月しか残っていない。しかし、昭和4年、5年の日記は岡部の行動が詳細に書かれている。また『岡部長景日記』³⁾として翻刻されており、日記資料としては比較的に使いやすい資料だと言える。

岡部長景本人に関する先行研究はないといっても過言ではない。伝記の編纂もなされていない。岡部長景を主題にしたものは『岡部長景日記』「解説」⁴⁾と「岡部長景の戦前・戦中・戦後」⁵⁾のみである。そして岡部長景の父長職の伝記として『評伝 岡部長職—明治を生きた最後の藩主』⁶⁾があり、一部長景について触れる部分がある。

岡部長景の日記に特筆すべきなのは、日本の上流階級としての華族の日常生活や社交生活にふれる部分が非常に多いことである。当時の華族の生活の実態をありありと表現している。しかしながら、いまだ岡部長景の家庭生活についての研究はなされていない。資料を読み込んだところ、日記も2年間しか残っておらず、岡部においては随筆の類もなく、家族についてまとまった情報はわずかしかないが、この日記を中心に岡部長景の言動を精査し、華族の家庭教育についての知見を広げたい。

2. 岡部長景の経歴

岡部長景は明治17年(1884)8月28日に旧岸和田藩藩主家岡部子爵家に生まれた。父親は旧

岸和田藩藩主岡部長職である。母親は旧郡上八幡藩主青山幸哉の四女錫子である。すでに上には清子、鍾子の二人の姉がいた。母錫子は長景が3歳になった明治20年10月29日に亡くなる。

その後の明治23年には父長職が旧加賀藩藩主前田齊泰の四女であり、前田侯爵家令嬢の坻子と再婚する。そして長景は、長剛、長挙、栄子、豊子、長世、盈子、長量、久子、長建、長伸、長章という11人の異母弟妹の兄となった。長景と長職末子の長章とは25歳の差があり、二人が並ぶと親子に間違えられた⁷⁾。

長景は学習院初等科、中等科、高等科を経て、東京帝国大学法科大学に進む。明治42年(1909)に卒業して、外交官補として外務省に入る。43年より駐米国大使館員となる。45年4月には加藤高明子爵の娘悦子と結婚し、大正2年(1913)8月10日長男長衡が生まれる。悦子は明治21年(1888)生まれで、母は岩崎弥太郎の長女春路⁸⁾である。また悦子は父加藤高明が英国公使として駐在したロンドンで幼少期を過ごしており、外国暮らしについて問題のない女性だった。その後長景は駐英国大使館員となり、長景一家はその家庭生活の初期を米国と英国で過ごす。

大正5年長景は帰国して、外務省本省での勤務となる。大正14年(1924)父長職が亡くなり、襲爵することとなる。昭和2年(1927)には外務省文化事業局の局長となる。

昭和4年長景は外務省から宮内省へ移り、内大臣書記官長兼式部次官となる。昭和5年には貴族院議員となる。宮内省への奉職はわずか一年半という短いものであった。

昭和4年息子の長衡は東京高等学校尋常科から東京高等学校理科へ進む。その後、東京帝国大学工学部を出て、陸軍の技術将校となった。昭和14年(1939)に長衡は旧長府藩藩主家毛利元雄子爵の次女綾子と結婚した。昭和16年に長衡の息子の長忠が、18年には長義が生まれ、長景は二人の孫の祖父となった。

昭和18年長景は東条英機内閣にて文部省大臣となった。終戦後はB級戦犯容疑で巣鴨拘留所に抑留され、その最中の昭和21年(1946)3月20日に妻悦子が亡くなる。その後、長景は公職追放となり、昭和27年公職追放が解かれて国立近代美術館館長なる。他に国際文化振興会の会長も務めた。その後昭和45年(1970)に亡くなる。

岡部家の親戚関係、とくに長景の兄弟の世代では旧大名家との姻戚関係がほとんどなく⁹⁾、財界との姻戚関係が形成されていた。長景は岩崎弥太郎の孫である悦子と結婚し、栄子は三井弁蔵と結婚し、岡部家では三菱財閥と三井財閥とのつながりを持った。長挙は朝日新聞社社長の村山龍平の娘と結婚し養子に入り、豊子は渋沢栄一の孫である尾高豊作と結婚し、久子は川崎造船所創業家の川崎芳熊と結婚、盈子はアメリカにて生糸の貿易で成功を収めた新井領一郎の息子米男と結婚している。これだけ子どもがありながら、一貫して大名華族との姻戚関係がない。

3. 岡部長景の家庭行動

昭和4年(1929)2月に長景は外務省から宮内省に転じ、内大臣秘書官長兼宮内省式部次長となる。式部職は宮中儀礼をつかさどる部署であり、式部次長としての長景の仕事は宮中行事の執行事務やそれへの出席、および外国の要人や駐日公大使の接待である。内大臣秘書官長としての仕事は、牧野内大臣のために多方面から情報収集を行い、また元老西園寺公望との連絡役

となることであった。このポストは職務上の拘束は少ない「優雅」なものであったが、同時に政治的には閑職であったという¹⁰⁾。

日記に出てくる彼の行動からみて、忙しく仕事をしている様子はあまりない。毎日朝から夕方まで役所に詰めていることはなく、午前中の遅くに職場に顔を出して昼ごろには帰るという生活である。またこの頃は仕事がないかわりに、私的な活動が精力的に行われている。長景は学習院の同窓会「桜友会」の会合や華族の政治研究グループ「十一会」などに積極的に参加している。十一会とは、大正11年に発足して毎月11日を会合の日とする華族会合であり、もともとは岡部や木戸幸一などの政治経済についての勉強会であったが、のちに近衛文麿が参加するようになり政治色が強くなり貴族院改革などを話し合うようになった。いわゆる革新華族とよばれるものたちが参加していた¹¹⁾。

またゴルフを通じての交際も多い。親類では三井弁蔵夫妻が多く¹²⁾、その他には織田、黒木、溝口、西尾、伊東の姓がよく出てきており、おそらく織田信恒、黒木三次、西尾忠方など十一会にもかかわりがある貴族院議員の友人たちであると推測できる。日記からは午前中には悦子と外出、午後は友人たちと外出、午後は家族で外出といった忙しい私生活ぶりが見受けられる。

さて、岡部長景日記より岡部の家族での外出行動を分析した。

〈表1〉昭和4年～5年における岡部長景の家族との行動回数

昭和4年(1929)	妻同伴	子ども同伴	家族同伴
私的行事	39	5	53
公的行事	21	0	2
社交行事	23	0	1

昭和5年(1930)	妻同伴	子ども同伴	家族同伴
私的行事	41	7	45
公的行事	31	0	0
社交行事	33	1	1

※私的行事は家族(妻・子ども)とのプライベートな集まり、公的行事は冠婚葬祭や歓送迎会に準ずるもの(見送り、見舞い)まで含めた。社交行事には仕事上あるいは華族としての集まりなどとした。

昭和4年と5年では家族での外出行動には数字の大きな違いは見受けられない。昭和5年の8月には貴族院議員の子爵互選選挙に出て、9月には議員となるが急に多忙になるというわけではなかったようである。

表からわかるとおり、もっとも多いことは家族での外出は私的行事である。家族での外出が多いのは、夏の間は三津¹³⁾の別荘で暮らしていたことが理由の一つにある。この三津の別荘は家族3人で下見にいき、昭和4年5月中旬に購入を決めている。日記から昭和4年と5年に

ついで悦子と長衡は夏休みの間中この三津の別荘で暮らしていたことがわかる。長景は仕事でしばしば東京に戻りながらも、家族でとボート遊びをしたり釣をしたりと海ならではの遊びをしている。また三津に滞在するあいだ、長景は長衡のために家庭教師を同伴させている。

家族での余暇活動はそれだけではなく、少なくとも月に一度は家族で外出し、芝居やコンサートあるいは活動写真を見たり、ただ銀座の界隈で外食や買い物を楽しんだりすることもあった。邸が赤坂にあり銀座などには外出しやすい立地だったともいえる。

また妻の悦子との二人での外出も非常に多い。もっとも多いのは芸術鑑賞で、観劇や美術展へ出かけている。とくに戦後は国立近代美術館館長となり美術方面で活躍した長景である。西洋から東洋までさまざまな展覧会やコレクションの売立に足を運んでいた。そこでは美術品や工芸品を購入することもあった¹⁴⁾。

公的行事としては葬儀や法事が多い。昭和3年には長建、4年には長量と二人の異母弟が亡くなっており、彼らの法事が多くなっている。また外務官僚としてのつきあいから、海外へ向かう友人などの送別会や見送りなども非常に多く、それには夫妻で出席していることも多い。この公的行事となると夫婦のみで、子どもを連れての外出がなくなる。

社交行事は、長景の仕事上の関係からの社交活動などが中心となっている。長景の業務の代表的なものは宮中に外国公大使を招いての晩餐会や午餐会に出席することであり、そこには妻の悦子も接待要員として出席する。また外交団を招いて御猟場での狩りに参加したり、長良川の鵜飼を見学したりということもある。また出張には悦子や長衡を伴っていき、出張と家族旅行を同時に楽しんでいる場合もある。

また外出するばかりではなく、家で過ごす一家団欒もある。宮内省の御猟場で狩りをして下賜された鴨をすき焼きにして一家団欒する記述が時折出てくる。また自邸には親戚や、親しい外国の大使館員などを招いて食事をしている。食事後の余興には活動写真の上映会をおこなう場合もあった。また悦子が自邸で開くティーパーティには長景は参加しないながらも、前日に美術品を出して飾り付けを手伝うなどの協力も惜しまない。

長景は子どものころから旅行と写真が好きだったようで、学習院時代には写真機を持って日本海側を一人で旅したという¹⁵⁾。食事会の余興として上映する活動写真も自分で撮影したものである。三津の別荘でも長衡がボート遊びをする様子を活動写真で撮ったり¹⁶⁾、また長衡の馬術の練習の様子を撮影しに出かけたりしている¹⁷⁾。

これらの行動からわかることは、非常に家族で過ごす団欒の時間を大切にしていたことである。妻との仲も非常によく、また息子との関係も親密である。

とくに家族の団欒として、頻繁に行われるのが舞台芸術の鑑賞である。歌舞伎などの日本の伝統的なものから、西洋のオペラなどその種類は幅広い。芸術の鑑賞は長景夫妻の趣味でもあると思う。しかし、長景には「衡には著名有益なるものだけを見せたい」¹⁸⁾との考えもある。飛行船ツェッペリン伯号が日本に来た際には、仕事で長景自身が行けなかったため、わざわざ知人に頼んで長衡を見学に連れて行ってもらっている。こういった外出行動がただの家族サービスではなく、家庭での教育という側面も大きかったことがわかる。

4. 岡部家の家庭教育

長景の幼少期におけるの家庭状況は資料を欠いていてわからないが、長景の青年期においては父長職は一家団欒を大切にしていたことがわかっている。長職の第二夫人である坻子が、家族が仲がいいことがすべての幸福の基礎であり、長職も長い海外生活から家族の団欒は大切であると考えており、岡部一家は一家団欒を味わって生活しているとしている¹⁹⁾。長職の一家団欒という考えかたは、長景の家庭にも伝わっていることは、前述の家族での遊興の多さからもわかる。

また坻子は乳母を雇わずに、出来るだけ育児は自分の手で当たっており、それまでの大名の伝統的な子育てとは異なる方針をとっていたようである²⁰⁾。

長職は写真が趣味であり、またアメリカ留学中や志摩の別荘でボート遊びをしている²¹⁾。高田千登世町²²⁾に邸を構えることになったときには、庭木を取り寄せて、その景観にはこだわりがあるようである²³⁾。長景も趣味の一つには写真および活動写真の撮影があり、また三津の別荘ではボート遊びや庭づくりを楽しんでおり、長景は長職の趣味を継承しているといえる。またボート遊びの楽しみについては孫の長衡も三津の別荘では楽しんでおり、祖父と父から継承しているといえる。

また長景は父のキャリアを沿うようなキャリア形成をしている。長職はイエール大学とケンブリッジ大学へ留学後、外交官となり、その後貴族院議員となり、司法大臣まで昇っている。長職は外交官としては条約改正の折衝に当たるなどの活躍をみせた。一方、長景は東大卒業後は外交官となり、その後貴族院議員となり、文部省大臣まで昇る。長景は外交官としては日本国内で対アジア政策に当たっていた。外交官としての仕事の華々しさについて長景は父親に比べるとやや劣るが、父と同じく国務大臣となっている。長景のキャリア形成のモデルとして長職の存在があったことがうかがえる。

さて、長景の家庭教育についてである。長景は 11 人兄弟であるが、息子の長衡は一人っ子である。

長景一家の家族での遊興の多さからも、また長衡について心配する文章はあっても長衡に対して怒っているような文章は登場しないことから、長景が非常に長衡のことを可愛がっている様子がわかる。長景は長衡だけがスキー旅行に出かけ一緒に宮内省の御猟場の猟に参加できなかったときには「鴨と雉の鋤焼を鱈腹食べたが、悦子は(—引用者略)余り食わず、長衡が居たらばと思った」、長衡が散髪から帰ると「衡は頭が寅ブチだどて笑ふ」²⁴⁾など、親子の仲がよいことがうかがえる。

長衡への幼少期の教育については資料を欠いていてわからない部分が多い。長景の仕事の関係上、大正 2 年(1913)生まれの長衡は乳幼児期を英国で過ごし、大正 5 年に日本に帰国した。

戦時中の昭和 18 年(1943)に悦子は長衡が小学校低学年のころの子育てについて「積極的にまづ身體を丈夫に鍛へることに頭を向けました、魚や肉を特にご馳走などとは思はないやう野菜や穀類を主とした農家風の食事をそれから寒中でも足袋をはかせずよその方が見てびっくりなさる位の薄着で通させるなど、生活を簡素々々ときびしく心掛けました」²⁵⁾と読売新聞に語っているが、昭和 17 年には「ほしがりません勝つまでは」というスローガンが流行している。そのためこの記事の内容がすべて事実なのかは疑わしい。

日記では昭和5年(1930)の春に東京高等学校尋常科から東京高等学校高等科理科に進んでおり、少なくとも中等科から学習院には通っていなかったことがわかる。

日記の中から、長衡の性格などが伝わってくる記述はほとんどないが、長景が東京高等学校で教職に就いていた山口察常²⁶⁾と長衡のことについて話したところ「先生はいつも衡の鈍重な性格は将来頼母敷と評して居られる」²⁷⁾とある。このことから、長衡はのんびりとした性格だったことがうかがえる。またそれについて長景が心配しているのではないかということも感じられ、そしてわざわざそれを日記に書き留めていることから大器晩成型だと教師に評価されてまんざらでもないという長景の親馬鹿ぶりも推測することができる。

長衡の高等科理科への進学については、長景は非常に心配しているようである。昭和4年の秋に、高等科の科の選択を考えるとときには、学校関係者に話を聞き、「今迄の様な勉強振にては文科を選ぶ方無難なるべく京大にでも入る位ならんと稍心細き話なり」²⁸⁾と非常に心配していることがわかる。しかし、長衡の決心は固く、「衡の高等科の科選定の最後の決定をなすべく、悦子、衡の三人で相談をなし、大いに決心を要し努力の必要を力説し、当人も大いにやる考えとなり、馬もやめてもよいといふ位の意気込ゆへ遂に希望通理科を選ぶことに定め願出に記入して渡してやった」²⁹⁾と長景は長衡の希望をかなえることにする。

そのすぐ翌日には「夕食は衡の決心につき愈々目的の大方針を定めて門出をなすことになったゆへ、内祝いの心地を以て赤飯を焚き鯛等つけた。当人大分緊張した様子」³⁰⁾と、またその翌日には「衡に贈る為、額仕立の為横半切に『男児決心出郷関』の七字を書いた」³¹⁾としている。勤皇の志士が詠んだ「男児立志出郷関 学若不成不死還 埋骨壱期墳墓地 人間到處在青山」である³²⁾。長衡の進路への決心を厳しくも温かい愛情で見つめていることが読み取れる。

また長衡の進学のために、前述の山口の家へと挨拶にいっている。「先生も本人が其気にさへなれば、必ず成績もよくなるだろうと「だろう」付きの話であったが、どうかそうありたいと之もあまり信念のなき返事をして置いた」³³⁾とある。また理科に進学してすぐにも山口のところへ挨拶にいき「衡の学業のことを話し、尚ほ本人の学校に於ける行状等について注意をしてもらふ様に頼んだ」³⁴⁾とある。非常に長衡の学校生活を心配していることがわかる。

しかし、長衡は昭和4年の秋に進学を決心したにもかかわらず、約1年後の5年の9月ごろには、理科を学ぶという気持ちが揺らぎ始める。

衡が過日来、急に士官学校に入りたいといひ出し、悦子とも種々相談して居ったが、夕方同人を呼で国家社会に奉ずる所以は一軍人として位のことではなく、理科か工科に進み、大いに奉ずる意気込の必要なることを説得した。夜就寝に際し、当人は更に文章に認め其の決意の程を述べてあったから、更に懇々説き夜半に及んだ。³⁵⁾

このことから、長景は一般的な軍人になることは反対だったようである。またその数日前には教育者である平生汎三郎³⁶⁾が「理科で進み、欧米人に勝る発明か何かをして国家の為に尽し併せて人類の為に貢献する様、大いに努めてもらいたいと激励してくれた」³⁷⁾としている。これは平生の話した内容ではあるが、長景としてはこのように長衡に科学者かエンジニアにな

ってもらいたいという思いがあったのではないかと考えられる。

また昭和初頭は華族の軍人へのコースは人気がなかったようである。大正4年生まれの上宮崇仁親王は学習院の中等科は一学年に三クラスで一クラスには20人の生徒であり、昭和7年陸軍士官学校に入るときには「陸海軍がPRして、軍人になれと言ってきたんだけど、成り手がなくて、私のクラスでは、私と徳川³⁸⁾君と二人が陸軍に入っただけで、海軍には一人もゆかなかったです³⁹⁾と、また「母はわたくしを文官にさせたかったらしいです⁴⁰⁾と語っている⁴¹⁾。このころは軍人志望の華族の人数が少なかったこと、また英国流に皇族が軍人になることが常識となっていたにもかかわらず、貞明皇太后が親王を文官にと望んでいたことから、当時の軍人への人気がなかったことがよくわかる。

長景は長衡の説得した後でも、奈良武次侍従武官長⁴²⁾に長衡の軍人志望について相談している。そして長景は奈良から「御止めになったほうがよろしかろう⁴³⁾との言葉ももらい、「区々たる青年将校等の意見とは異り武官長の意見は衡にとりても大いに傾聴の価値がある⁴⁴⁾と感謝している。長景は長衡の将来の軍人への希望を反対しながらも、息子の志望を断ってもいいのかという迷いがそこにはあったのではないかと考えられる。できるだけ子どもの意思に沿った教育をと考えながらも、やはり親としての子どもの将来への希望とが拮抗していることがわかる。

その後長衡は東京帝国大学工科大学を卒業して陸軍の技術将校となっている。これは長景のいった通りの道を、長衡が自身の希望も絡めながら進んでいった結果とも考えられる。

昭和5年には、姉鍾子の息子英彦や末弟長章の大学進学を考える年でもあり、長景は親身になって相談に乗っている。岡部家の家長となった長景はとくに長章について心配しているようである。「長章来邸。夕食を共にして将来のことを相談したるが、大学は考古学を専攻したく、東洋古代史と交渉ある問題にて研究の余地も多く、多少困難なる事項ゆへ学生少なく面白かるべしとのことゆへ、大いに賛成をなしたる⁴⁵⁾としている。そして、その話を聞いた約2週間後に、出張で奈良の春日大社大祭へ行った際には、京都に立ち寄って旧岸和田藩出身の考古学者である浜田耕作⁴⁶⁾と会合を持ち、長章の進路についての相談をして、東京帝国大学へ進学し、東洋史を学び、その後京都帝国大学で考古学を専攻するのがよいだろうという方針を打ち出している⁴⁷⁾。長章はこの話を聞き、東大で東洋史を専攻するが、卒業後は京大へは行かずに帝室博物館の연구원となり、そして昭和天皇の侍従をつとめ、戦後は大学で教鞭をとるようになった⁴⁸⁾。

仕事などのコネクションを使って、子弟の進路をその当時の一流の人物に相談をし、それを子弟へのアドバイスに利用することができたことがわかる。長景が進路についてアドバイスをした長章も長衡も、長景のキャリアとは異なったキャリア形成をしているが、つねに必要なに応じてよい助言が与えられる環境にあったのではないかと考えられる。

長職は子どもたちに大名華族との姻戚関係を結ばせなかったが、長景は大名華族である毛利子爵令嬢綾子と長衡を結婚させている。少なくとも長景も子爵家との婚姻であり、華族嗣子としてはやはり爵位のある家を望んでいたということかもしれない。

さて、日記には長衡は馬をやめてでも理科に進学したいとあったが、馬術競技はやめることはなかった。昭和4年に宮内省に入った長景は長衡のために、赤坂御所の厩舎での乗馬練習が

できるように許可をもらっている。昭和5年の段階では数学の成績が悪いようであるが⁴⁹⁾、長衡は高等科でも馬術競技をしており、昭和5年のインターハイで東京高等学校は4位に入賞して景品の鞭を獲得している。また長衡は昭和39年(1964)の東京オリンピックにも出場した⁵⁰⁾。

そして、長衡の息子長忠は昭和16年(1941)に生まれ、昭和40年学習院大学を卒業後、日本競馬協会に勤務、その後学習院大学馬術部監督に就任した。長衡の馬への情熱を、その息子は継承したようである。

また、昭和6年10月に東京高等学校で同盟休校事件があったさいにも、長衡のことを心配している。すでにこの年の1月の時点で、「昨今東京高等学校に拘引学生釈放問題をきっかけに左翼運動あり。衡は毎日謄写刷のものを持帰り、学校当局の無力を訴へて居る。実に困った騒ぎである」⁵¹⁾と長景はこの騒ぎの動向を心配していた。この時点では長衡のことをことさら心配している様子はない。この騒動は昭和4年の東京市電争議のさいに、駅などでビラをまいた学生が逮捕されて退学処分になったことからきているようである。10月の同盟休校は文科の指導によってなされたが、長衡の所属する高等科理科2年でも乙類の学生がクラス単位で同盟休校に参加している。この間は長景の日記の記述が欠落しているので、長衡がどのように学校生活を送っていたのかは不明である。この事件は、学校側が同盟休校に参加した者について厳罰をしないようにと父兄たちが奔走することで終息を見せた。その後、保科正昭子爵が東京高等学校での事件後についての話合いに参加したところ、学校側が「長衡の態度を賞讃して居られたる」⁵²⁾と参加しなかった長景に教えている。このことから、長衡は同盟休校に加担しなかったと推測できる。

長景は学生の左傾について「誠に青年が血気に逸りて脱線し、国法に触れる様なことになるのは気の毒千万であるが、処分は止むを得ないことであろう。困った世相ではある」⁵³⁾としており、厳しいながらも若者たちに同情的である。

岡部長景の父親像としては、子煩悩ということである。長景が長衡に大して厳しく接しているのは進路や学業のこのみである。しかし、長衡が高等学校を退学し士官学校に行きたいと言い出した時は、時間を割いて説得にあたっており、そこに厳しさはあっても支配的な父親像は感じられない。長景の日記からは家族での外出の多さや、長衡の誕生日や進級祝いなども家族の行事として大切にされているようすがわかる。日記からは岡部夫妻が一人っ子であった長衡を大切に育てていたことがうかがえる。

5. まとめ

岡部長景の妻との私的な外出数は、いままで研究対象としてきた有馬頼寧と阪谷芳郎と比較して非常に多いものであった。岡部家では昭和4年から5年の2年では各年約40回、有馬家では大正8年と9年の2年間で平均2.5回、阪谷家では大正7年から9年の3年間のうちに1回である。有馬家の夫婦仲は不仲であり、有馬は頻繁に花柳界に出入りしたり、愛人を作ったりしている。阪谷家の夫婦仲は資料がなく不明である。しかし、岡部家については外出回数からして非常に仲の良い夫婦であったことがわかる。

また岡部家では家族での私的な外出も非常に多い。岡部家では昭和4年から5年の2年では各年約50回、有馬家では大正8年では13回そして9年では3回、阪谷家では大正7年から9

年の3年間では各年約30回である。ただし有馬には6人、阪谷には7人というたくさんの子どがおり、家族での外出といっても子どもが全員揃うというわけではないので、有馬と阪谷についてはそれぞれの子どもの外出回数はさらに少ない。岡部家では子どもとの関係が密接であり、夫妻が一人息子の長衡にたくさんの愛情を注いでいたことがわかる。また子どもを伴っての外出については、岡部も有馬や阪谷と同様に教育という側面を意識していることがわかった。

長衡の教育としては、幼少期に英国で過ごしており、おそらく欧米流をとり入れたことは間違いないだろう。しかし、日記の残る昭和4年においては長衡はすでに15歳であり、そのためか生活上についての躰などについては記すところがなく、不明である。しかし、坵子が自らの手で子育てをしていたことから、長景夫妻も自らの手で子育てをすることについてはある程度の自由があったのではないかと考えられる。

長景は学習院の同窓会桜友会の活動に対して力を入れていたにもかかわらず、長衡を東京高等学校に通わせるなど一般的な華族子弟とは違うコースに進ませている。そして長景は長衡を自分のキャリアとは全く異なったコースである理系へと進ませた。

子爵阪谷芳郎家は希一そして芳直と三代続けて東京帝国大学で経済学を修めて、大蔵官僚や日銀職員という財政や金融にかかわる仕事に就いており、阪谷家ではキャリアコースを継承しているといえる。

伯爵有馬頼寧の父親頼萬は有馬家当主という立場のみでとくに仕事には就かない人物であったが、有馬は役人および教師から政治家というキャリアを積んだ。そして息子の頼義は成蹊学園と早稲田第一高等学院を中退して作家になるというキャリアコースであり、父親とはまったく異なるものであった。しかし、そこには頼義の親への反抗という側面も見られる。実は有馬頼寧も無職状態の頼萬には不満があり、頼寧と頼義のあいだには親や華族社会への反骨心の継承があったかもしれない。

岡部長景については、自身は父親長職からのキャリアコースを継承しているが、非常に親密な関係である息子長衡にはそうさせなかった。

長景自身が長衡にどのような期待を持っていたか日記の中で語られることはあまりなかったが、他の人物たちとの会談の中などから総合すると、国家の為に人類の為になる人物になってほしいという願いはあったようだ。長景は長衡が高等科をやめて、士官学校に入りなおして軍人になりたいという希望は説得してやめさせている。しかし、長衡は一度親に反対された軍人への道を、東京帝国大学の工学部を卒業したあとに、技術将校となることでかなえている。戦後の長衡の経歴は有限会社トモエユニット社長とのことであるが、残念ながらどのような会社であるか実態がつかめなかった。

長景は長衡が自身と異なるキャリアコースを選択しても、さまざまなコネクションを活用して、長衡にはさまざまな支援をしていることは間違いない。

戦中において長衡は当時としては軍人になることで国家の役に立つ人物となり、また戦後はオリンピック選手になりスポーツ振興という面で国家の為に役に立つ人物となっている。その点では長景の家庭教育の目標は達成していると言えるのではないだろうかと考えられる。

注

- 1) 伊藤真希「華族の家庭教育—有馬伯爵家を中心として—」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告第4号』愛知淑徳大学現代社会研究科 2009年
- 2) 伊藤真希「阪谷芳郎の家庭教育」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告第6号』愛知淑徳大学現代社会研究科 2011年
- 3) 尚友倶楽部編『岡部長景日記』尚友倶楽部 1993年
- 4) 三浦裕史「解説」前掲『岡部長景日記』
- 5) 奈良岡聰智「岡部長景の戦前・戦中・戦後」『創文』創文社 2009年
- 6) 小川原正道『評伝 岡部長職—明治を生きた最後の藩主』慶応義塾大学出版会 2006年
- 7) 岡部長章『ある侍従の回想記—激動時代の昭和天皇』朝日ソノラマ 1990年 35頁
- 8) イギリスの社交界で、春路は日本の岩崎財閥の出身であるとして有名になり、加藤高明の英国公使としての交際に大いに貢献したという。岩崎徂堂編『明治大臣の夫人』大学館 1903年 225-227頁
- 9) 長職の長女清子は旧高德藩藩主家戸田子爵家へ嫁すが、のちに離縁をしている。次女鍾子は経済学者の井上辰九郎と結婚。
- 10) 前掲「解説」『岡部長景日記』 613、620頁
- 11) 後藤致人「大正デモクラシーと華族社会の編成」『歴史学研究』青木書店 1997年
- 12) 岡部家はゴルフについては関係が深い。妹栄子は日本女子ゴルフ界の先駆者である。妹盈子の舅新井領一郎は日本にゴルフを広めた人物の一人である。
- 13) 旧静岡県田方郡内浦村三津。戦後沼津市に編入した。今でも残る松濤館という旅館の近くに別荘を買った。富士山の景勝地である。沼津には皇室御用邸があり、周辺は上流階級の別荘地のひとつであった。
- 14) 先祖伝来の美術品をはじめとして、関東大震災と空襲で家と共に焼失してしまったものも多いという。
- 15) 中村鉛子『家庭の模範 名流百家』博文館 1905年(国会図書館近代デジタルライブラリー) 58頁
- 16) 前掲『岡部長景日記』 昭和5年8月25日条
- 17) 前掲『岡部長景日記』 昭和5年12月6日条
- 18) 前掲『岡部長景日記』 昭和5年4月19日条
- 19) 前掲『家庭の模範 名流百家』63-64頁
- 20) 前掲『家庭の模範 名流百家』48頁
- 21) 前掲『評伝 岡部長職—明治を生きた最後の藩主』263-268頁
- 22) 現豊島区
- 23) 前掲『家庭の模範 名流百家』60-62頁
- 24) 前掲『岡部長景日記』 昭和6年1月3日条
- 25) 「健民家庭 薄着で歩け歩け 大東亜の天地に伸びる子を 岡部文相夫人のお宅」『読売新聞』朝刊 1943年5月4日
- 26) 山口察常(1882-1948) 中国哲学者。愛知県出身。東京帝国大学卒業後中学に留学。帰国後は東京高、大正大学教授などとなった。
- 27) 前掲『岡部長景日記』 昭和5年4月27日条
- 28) 前掲『岡部長景日記』 昭和4年10月8日条
- 29) 前掲『岡部長景日記』 昭和4年10月10日条
- 30) 前掲『岡部長景日記』 昭和4年10月11日条
- 31) 前掲『岡部長景日記』 昭和4年10月12日条
- 32) 堀内静宇編『維新百傑』成功雑誌社 1910年(国会図書館近代デジタルライブラリー) 38頁
- 33) 前掲『岡部長景日記』 昭和4年10月17日条
- 34) 前掲『岡部長景日記』 昭和5年4月27日条
- 35) 前掲『岡部長景日記』 昭和5年9月18日条
- 36) 平生鈞三郎(1866-1945) 実業家、政治家。はじめは出身校の東京商業学校の教師だったが、東京海上火災株式会社に入り、実業家に転身。川崎造船社長などをつとめる。のちに貴族院議員、枢密院顧問となる。また大正12年には甲南学園を設立し、学校教育に取組んだ。
- 37) 前掲『岡部長景日記』 昭和5年9月16日条
- 38) 旧水戸藩藩主家の徳川圀禎
- 39) 金沢誠・川北洋太郎・湯浅泰雄編『華族—明治百年の側面史』講談社 1968年 370頁 3-5行
- 40) 前掲『華族—明治百年の側面史』370頁 9行
- 41) 前掲『華族—明治百年の側面史』368-371頁
- 42) 奈良武次(1868-1962) 軍人。男爵。平民出身で陸軍士官学校、陸軍大学校を卒業。陸軍省軍務局砲兵課長、支那駐屯軍司令をへて官軍務局長となる。東宮武官長、侍従武官長として昭和天皇の側近となる。

